ほんとうの生涯教育とは

昭和 55 年東北大学で行なわれた漢字教育研究会で発表しましたことですが、大阪のある幼稚園で論語の教育をやっています。これは送り仮名一つない全くの白文です。これを子どもたちが喜んで読んでいる。これは三歳の子どもから四歳、五歳まで、いずれも同じテキストでやっていますが、三歳の子どもが一番喜んでやっているというのです。得意になって読むのです。その様子を八ミリ映画に撮りまして、東北大学で発表したわけですが、子ども達が皆目を輝かして読むのです。こういう教育は三歳から始めなくては遅いと思います。そして、これは一生にわたって続けなければいけないものであると思います。今、幼稚園でやっている論語教育は、昔流の素読ではありません。講読です。内容を子どもなりに解らせる努力を致しております。三歳の幼児に論語なんか解るはずがないと言う人がいます。それは私どもと同じ高さの理解を求めるからです。三歳児は三歳児なりに理解出来ます。御承知のように論語というものは、その年齢に応じて、つまり、経験に応じて理解する書物であって、年齢により味わいが異なってそれでよいのです。谷川徹三先生は旧制一高で安井小太郎先生に論語を習って、初めて「論語ってすばらしいな」と、思われたそうであります。自分独りで読んだ時にはわからなかったことが理解出来て、それで論語はすばらしいと思ったのだそうでありますが、その後大学の教師になり、教える立場になって論語を読んでみたら、あの時わかったと思っていたのは本物ではなかったなと思った。そして今また、論語を読んでみると、あの時わかった積りでいたのもまだまだやっぱり足りなかった。こういう意味のことを語っていらっしゃいます。このように論語という書物は、人間の成長と共に理解の程度や味わい方が変って行くものであります。だから私は、三歳児には三歳児なりの論語の読み方がある、と思うのです。

幼児期に、一生涯読み続けるに足る価値のある書物を与えてやり、その読み方の基本を築いてやって、それを一生涯続けることの出来るようにしてやること、これがほんとうの国語教育、生涯教育としての国語教育というものの姿だろうと思うのであります。

二千年も以上も昔の外国の古典が、そのままの形で幼児に読めて理解出来るのです。そこに漢字のすばらしさがあります。漢字は、数千年にわたって、中国人や日本人の精神を表現して来たものです。終生の学習に耐えられるばかりか、味わえば味わうほどに味の出る文字です。その基本はぜひ幼児期に養っておき、「完璧、推敲、矛盾、蛇足……」など、背景の深い熟語は、その後徐々に学んで行けばよいと思います。

最後が舌足らずになりましたが、時間になりましたので、これで私の話を終らせていただきます。